ま

唇音にして單子音の一つ。

ま 間(名) 〔一〕あひだ。●時間。●距離。〔二〕部屋。●室。〔三〕音樂上の詞。拍子。●時。●タイム。

ま 魔(名) ばけもの。●惡鬼。●惡神。●惡魔。

ま 馬(名) うまに同じ。

ま 眞(名) 〔一〕まことの。●純粹の。○「眞心」「眞水」〔二〕美稱。○「眞鳥」「眞玉」

まい 枚(名) 〔一〕紙莚などの如き平たきものを數ふる詞。○「美濃紙十枚」〔二〕德川時代金銀を數ふる詞。……金壹枚は七兩二分。銀一枚は四十三匁。

まい 烏牛(名) 黑色の牛。(和名抄)

まひィ 舞(名) 踊の高尙優美なるもの。

まひィ 幣(名) 〔一〕神に物を棒ぐる事。●供物。〔二〕人に物を贈る事。●賄賂。……(雅)

まいど 毎度(副) いつも〳〵。●度々。●幾度も。●毎々。

まひィど 廻戸(名) 開戸の一種。押し廻して開くやうに作れるもの。

まぬりおんじゃうじょう 參音聲(名) 禁中にて節會等の日。伶人庭上に進み來る時に奏する雅樂。

まいる 哩(名) 英語より來る。◎鐵道線路などに用ふる里程。常の里程十四町四十三間一尺三寸六分にあたる。●英里。

まゐる 參(自動四段) 〔一〕卑しき處より尊き處に行く。●參上する。●參詣する。〔二〕行く。●至る。……貴人の前にて云ふ詞。〔三〕きこしめす。●めしあがる。○「御酒まゐる」

まひィあォふゥぎ 舞扇(名) 舞を舞ふ時に用ふる扇。

まゐたる (自動四段) 參り至る。(古)

まいさゥう 埋葬(名) 死人を埋め葬むる事。△(動)—埋葬す。

まゐづ (自動下二段) 參り出づる。●詣づる。(古)

まひィづる 舞鶴(名) 紋の名。兩翼を張りたる鶴を畫がきたるもの。

まひィなひ 賂(名) すべて幣に同じ。

まひィなノふ 賂(自動四段) まひなひを行ふ。

まゐらす 參(他動下二段) 差上ぐる。●進上する。

まゐらす 參(助動下二段) 奉る優美なる詞。○「おく

りまゐらす」「存上まゐらせ候」

まひぃうど 舞人(名) まひびとに同じ。(雅)

まゐのぼる 参上(自動四段) 参り上る。(古)

まゐく 参來(自動カ變) 参り來る。(古)

まひぃぐるま 舞車(名) 舞を舞ばせては挽きあるく車。祭禮の山車として用ふるもの。東京にいふ踊屋臺の類。

まいまい 毎々(副) いつも。●度々。●毎度。

まひぃまひぃ 舞舞(名)〔一〕近古行はれたる一種の舞曲。扇拍子にて舞ふもの。〔二〕之を演ずる女役者。●舞妓。

まひぃまひぃつぶり (名) 虫の名。蝸牛に同じ。

まひぃこ 舞子(名) 宴席に侍して舞を舞ふ少女。

まひぃご 迷子(名) まよひ子の略。

まひぃて 舞手(名) 〔一〕舞人。〔二〕舞の上手。

まいて (副) まして。●況んや。●其上。(雅)

まひぃぎぬ 舞衣(名) 〔一〕舞を舞ふ人の着る衣。〔二〕能裝束の一種。長絹に似て裾のつゞきたるもの。

まいき 枚擧(名) 一つ一つ數へ擧ぐる事。△(動)—枚擧す。

まひぃぎぬ 舞桙(名) からざをの一名。

まいみ 眞忌(名) 致齋を見よ。

まひぃびと 舞人(名) 舞を舞ふ人。

まひぃひめ 舞姫(名) 舞を舞ふ女。●舞子。

まいす 賣僧(名) 不德の僧。●不品行の僧。

まろ 丸。圓(名) まろき事。●圓形。△(形)—まろなる。(副)—まろに。

まろ 麿(名) 人また手飼の犬などを愛し呼ぶ詞。常に名の下に附けて云ふ。○「人麿」「虫麿」

麿(代) 余。●拙者。●おれ。●此方。●身ども。……男女ともに用ふ。

まろばかす (他動四段) まろばすに同じ。

まろばす (他動四段) まろぶ樣にする。ころがす。●ころばす。

まろどの 丸殿(名) 丸屋に同じ。

まろを 丸緒(名) 丸く組み打ちたる紐。

まろがる (自動四段) まろぶ。●ころがる。

まろかる (自動下二段) 〔一〕丸まる。●丸くなりて一つに固まる。○枕「莖さもにぬれまろかれつきて」〔二〕一つになる。●一かたまりになる。○源氏「涙に(髮が)まろかれたるは

いとあはれなり」

まろがろ (名) 麿が父。(記)

まろがなへ 丸鼎(名) 釜。(和名抄)

まろがしら 丸頭(名) 坊主の頭。(狹衣)

まろがす (他動四段) まろばす。●ころがす。●丸める。

まろね 丸寐(名) 帶をも解かず寐る事。○拾遺「夏草の茂みに生ふる丸小菅まろが丸寐よ幾世へぬらん」

まろらか 丸き有樣(形)—圓らかなる。(副)—圓らかに。

まろむ 丸(他動下二段) 圓くならする。

まろうど 客人(名) 稀に來る人。●賓客。●客。

まろうどゐ 客人居(名) 客座敷。●客殿。●客間。

まろや 丸屋(名) 自然生のまゝの草木を用ひて假初に構へたる家。

まろやか 丸き有樣。△(形)…まろやかなる。(副)—まろやかに。

まろぶ 轉(自動四段) 丸き物のくるくゝ廻る。●ころぶ。●ころがる。

まろぶし 丸臥(名) 丸寐に同じ。(堀川)

まろこすげ 丸小菅(名) 丸く小さく生ふる菅。(拾遺)

まろきばし 丸木橋(名) まるき橋に同じ。

まろきぶね 丸木船(名) まるきぶねに同じ。

まろし 丸(形。形狀言ク活) 角の無き有樣。●圓形である。

丸數珠(名) 粒の丸き數珠。(賴政集)

まろずず 眞羽(名) 鷲の羽にて造りたる矢の羽。

まば 眞裸(名) 赤裸。(宇治)

まばたか (名) またたきに同じ。

まばたき 疎(名) 物と物と接近せずして間の透きて居る事。●稀。●疎△(形)まばらなる。(副)—まばらに。

まばら 眞萩(名) 萩に同じ。(歌詞)

まばゆし (形。形狀言ク活) 〔一〕光線に對して目の明けにくきやうの感じ。●まぶしい。〔二〕はづかし。

まに (名) 占。(記)

まに (副) まに〳〵に同じ。○萬葉「君がまに聞し給ひて」

まにまに (副) 〔一〕に隨ひて。●につれて。●隨意に。●まゝに。●と共に。○萬葉「神無月時雨にあへるもみち葉の吹かば散りなん風のまに

〈〔二〕誤りて後世は間に間にの意にも用ふ。◎透間々々に。○「元日や客のまに〈眠けさす」

まにあひ

（名）　紙の名。鳥の子紙の一種にして屏風などを張るに用ふるもの。◎三尺四幅に間に合ふ丈の大さなる故の名。

まにしゅ

麻尼珠（名）　如意寶珠（によいはうじゅ）を見よ。

まほ

眞帆（名）　帆。●順風に充分張りたる帆。

まほ

（名）　完全。●十方。●正則。●正面。△（形）—まほなる。（副）—まほに。

まほろば

（名）　まほらまに同じ。（記）

まぼろし

幻（名）　〔一〕夢と現との間にて。覺めて居る時。無き物の目前に現はれて見ゆる事。●有るが如く無きが如きもの。〔二〕亡き魂の住處までも探り至るを得る一種の幻術師。○源氏「尋ねゆくまぼろしもがなつてにても雪のありかをそこと知るべく」

まぼる

（他動四段）　〔一〕貪る。●貪り食ふ。（土佐）〔二〕守るに同じ。

まほら

（名）　山に包まれたる平地。●國の中央の地。（萬葉）

まほらま

（名）　眞平庭（まひらには）の意か。◎まほらに同じ。（紀）

まほふ

魔法（名）　〔一〕惡魔の行ふ術。●魔術。〔二〕人間が惡魔を使ひて行ふ術。●幻術。

まほめっとけう

回々教（名）　宗教の名。六世紀の頃亞剌比亞國メッカに生れたるマホメットを祖とするもの。

まほし

（助動シク活）　まくほしの略。◎願の詞。●たいと思ふ。●してほしい。○「見まほし」「せまほし」

まと

的（名）　〔一〕弓を射る時。矢の目當にするもの。〔二〕總べて物事の目當。●目的。

まと

眞砥（名）　砥石の一種。刀を研ぐに用ふるもの。（和名抄）

まと

（他動）　待つの轉。○萬葉東歌「雨をまとのす君（ゐらまとせも）」

まど

窓（名）　明り取り又は風通しの爲に壁の一部を切り開きたる處。

まどゐ

圓居（名）　〔一〕車座に坐する事。●團欒。〔二〕集會。

まどひ

纒（名）　〔一〕武家時代。出陣の時に用ひたる其家の印。〔圖〕

〔二〕火消の組合の印。其組合の記號など記したるもの。

まどひ

惑(名)　惑ふ事。●疑惑。●疑念。

まどろむ

(自動四段)　少し眠る。●ころ〳〵とする。

まとば

的場(名)　弓術を學ぶ爲めに的を据ゑたる所。●射場。●射的場。

まどほ

間遠(名)　〔一〕時間の遠く隔たる事。間を置く事。〔二〕距離の遠く隔たる事。●まばら〔三〕織物の目のあらき事。……△(形)まどほなる。(副)—まどほに。

まどほのころも

間遠衣(名)　目をあらく織りたる衣。(雅)

まどはる

纏(自動下二段)　まつはる。●卷き付く。●からまる。

まどはかす

(他動四段)　惑はすに同じ。

まどはす

纏(他動四段)　纏はしむる。

まどはす

惑(他動四段)　惑はしむる

まどか

圓〔一〕まろき有樣。〔二〕物の纏まる有樣。●團圓。……△(形)—まどかなる。(副)—まどかに。

まどむ

纏(他動下二段)　物事を一つに取統ぶる。●結局を付くる。

まとふ

纏(他動四段)　卷き付くる。●からめる。

まとふ

纏(自動四段)　まつはる。●卷き付く。●からまる。

まどふ

(他動四段)　償ふに同じ。

まどふ

惑(自動四段)　〔一〕迷ふ。●心暗みて是非の分らぬ。〔二〕あわてる。○源氏「まどひて來て見るに」〔三〕亂るゝ。○宇治「心地まどふ」

まだう

魔道(名)　魔の世界。●天狗界。

まどのほたる

窓螢(句)　支那の昔。車胤といふ人の家貧しくて夜中讀書する燈油なかりしかば螢を窓に集め其光にて勉學せし故事。

まどのゆき

窓雪(句)　支那の昔。孫康といふ人の家貧しくて夜中讀書する燈油なかりしかば。雪を窓に集め其光にて勉學せし故事。

まどころ

(名)　政所(まんどころ)に同じ。

まどし

(形。狀言ク活)　〔一〕貧し。〔二〕乏し。○徒然「財多ければ身を守るにまどし」

まども

(名)　眞向。●正面。

まどまもうし

的申(名)　射場にて的の傍に立ち旗にて矢の當たりしや否やを知らする役。

まち

町(名)　〔一〕田の仕切り。●田の一區域。〔二〕商

家の集まりたるところ。●又は其中の通路。〔三〕人家の集まりて繁榮したるところ。〔四〕距離を測る詞。●ちやう。

まち　襠（名）　袴の股の隔の處。

まち　待（名）　〔一〕待つ事。〔二〕祭。○「庚申待」「お日待」〔三〕兼ねて作りて買ふ客を待つの意。◎出來合。○「待兜」「待直垂」

まちいりおのう　町入御能（名）　德川時代に城中にて催し江戸中の町人に見物させる能樂の稱。

まちいりのう　町入能（名）　町入御能に同じ。

まちとる　待取（他動四段）　待ち受くる。●待ち得て事をする。（雅）

まちどほ　待遠（名）　退屈するほど待つ事。△（形）—待遠なる（副）—待遠に。

まちがひ　間違（名）　違ひ。●相違。●違變。

まちがた　町形（名）　占を爲す時其鹿の肩または龜甲に畫し置く田字形の稱へ。……さはかみを參考せよ。

まちがたに　待難に（副）　待ち兼ねて。（記）

まちがふ　間違（自動四段）　違ふに同じ。

まちがぶ　間違（他動下二段）　取違へる。●麁忽する。

まちかぶと　待兜（名）　出來合の賣物の兜。

まちかし　間近（形。形狀言ク活）　間の近き。

まちだかばかま　襠高袴（名）　袴の一種。襠の高きもの。今日男子多くは之を用ふ。

まちぐそく　待具足（名）　出來合の賣物の具足。

まちまち　區々（副）　一定せぬ有樣。●樣々。●區々。（又）—まち〳〵に。

まちぶぎやう　町奉行（名）　德川時代の制。市中の取締をなさしむるため江戸。京、大坂、駿府の四所に置きたる役。

まちぶせ　待伏（名）　物陰に待ち居て襲ひ擊つ事。●要擊。

まちまち　待々（副）　待ちつゝ。

まちあひ　待合（名）　〔一〕待ち合ふ事。又は其場所。〔二〕待合茶屋の略。

まちあひぢや　待合茶屋（名）　人を待合はせて相談などする席を貸すを業とする家。

まちあしだ　待足駄（名）　出來合の賣物の足駄。

まちざけ　待酒（名）　客を待ちて釀し置く酒。（萬葉）

まちきんたち　（名）　まへつきみに同じ。

まちぎみ　（名）　まうちぎみに同じ。

まちびたたれ 待直垂(名) 出來合の賣物の直垂。

まちびけし 町火消(名) 德川時代藩々の抱の火消に對して江戸市中の消防組をいふ。

まり 鞠毬(名) 玩具の名。●絲または革にて作れる球。

まり 椀。盌(名) 古へ水など入れたる金屬の器。

まりうち 毬打(名) 〔一〕古代遊戯の名。打毬。〔二〕打毬に用ふる毬打の棒。

まりぐつ 鞠沓(名) 鞠蹴る時に履く沓。

まりくくり 鞠括(名) 鞠を造る工人。

まりしてん 摩利支天(名) 天竺の神の名。火星の女神。世には軍神武神として祭らる。

まぬ (他動下二段) 免。

まぬかる 免(他動下二段) 眞似する。

まぬく 間抜(名) 〔一〕物事の間を抜く。●うろぬく。〔二〕馬鹿げる。●うつける。

まぬけ 間抜(名) 間の抜けたる事。又は其人。●とんま。●うつけ。

まる 丸。圓(名) 〔一〕角の無き形。滿月の如き形。●玉の如き形。〔二〕全體。〔三〕城郭の一區域の稱。○「本丸」「二の丸」「三の丸」「西の丸」「丸の内」「四」人、刀劍、犬、舟などを親しみ愛して呼ぶ稱へ。○「多聞丸」「阿若丸」「東京丸」「小烏丸」「翁丸」

まる (名) 小兒の大小便をする桶の如き器。

まる (他動四段) 大小便をする。●ひる。

まるば 丸又(名) 又を附けて無き刀劍類。

まるぼん 丸本(名) 淨瑠璃本にいふ詞。全篇少しも拔かずに載せたる本。

まるおび 丸帶(名) 婦人の帶の一種。幅の廣きものを折りて裏表としたるもの。

まるわげ 丸髷(名) 女髮の結ひ方の名。現今妻たる人の正式及び普通に結ふもの。

まるた 丸太(名) 材木の名。松杉などの枝を拂ひ皮を剝ぎたるもの。

まるだけ 丸竹(名) 割らぬ竹。

まるだけゆみ 丸竹弓(名) 丸竹に弦を掛けたる弓。

まるね 丸寐(名) まろねに同じ。

まるのみ 丸呑(名) 食物を嚙まずに呑み込む事。

まるやけ 丸燒(名) 火事に遭ひて家も諸道具も殘らず燒くる事。●全燒。

まるやき 丸燒(名) 切らずに其儘燒く事。

まるまげ 丸髷(名) まるわげに同じ。

まるごし　丸腰(名)　武士にして刀を帶びざる事。

まるえり　丸襟(名)　裝束の襟にいふ詞。―くびかみに同じ。

まるで　(副)　全く。●殘らず。●悉皆。

まるあばび　丸鮑(名)　熨斗鮑に對して丸の儘乾したる鮑をいふ。

まるざや　丸鞘(名)　黃金作りの太刀。全體總べて鞘までも金にて包みたるもの。

まるき　丸木(名)　伐りたるまゝ鉋も鋸も加へぬ材木。●丸太。

まるきばし　丸木橋(名)　簡單に丸太を渡したる橋。●獨木橋。

まるきぶね　丸木船(名)　大なる丸木を刳りて作りたる船。●獨木舟。

まるきゆみ　丸木弓(名)　丸木の儘作りたる上古の弓。梓弓、梔弓、檀弓、槻弓の類。

まるし　形(形。形狀言ク活)　まるしにに同じ。

まるもの　丸物(名)　小袖の異名。

まな　眞麻(名)　麻に同じ。(新續古今)

まなどこ　間男(名)　夫ある女の忍び男。●密夫。●姦夫。

まなかもめん　眞岡木綿(名)　木綿の一種。野州眞岡地方の名產。

まなす　申(他動四段)　まうすに同じ。

まはり　廻(名)　(一)廻る事。●巡廻。●順番。(二)周圍。(三)一週間。

まはり　(名)　飯の菜。●おかず。○四季物語「をけらの餅。つぐみの鳥など燒きて奉り御かれいひの御まはりに奉れば」

まはりばん　廻番(名)　順番。又は其當たりたる番。

まはりどほし　(形。形狀言ク活)　物事の飲込のわるき。●事情にうとき。●迂遠である。

まはりどうろう　廻燈籠(名)　燈籠の一種。火の力にて廻轉し影繪の見ゆるやうに作れるもの

まはりぶたい　廻舞臺(名)　廻轉する仕掛になりたる芝居の舞臺。

まはりみち　廻路(名)　近き方を行かずして遠き所より廻り行く路。

まはりもち　廻持(名)　廻番にて物を持つ事。

まはる　廻(自動四段)　丸く行く。●めぐる。●ゆきわたる。●順番が來る。

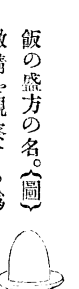
まはかす　(他動四段)　廻すに同じ。(今昔)

まわた 眞綿(名) 蠶の繭にて造りたる綿。

まはッし 廻(名) 廻す事。●廻し纏ふもの。

まはッしがっぱ 廻合羽(名) 合羽の一種。引廻して着るもの。

まはッしもり 廻盛(名) 飯の盛方の名。〈圖〉



まはッしもの 廻者(名) 敵情を視察する爲めの忍びの者。●間諜。●間者。

まはッす 廻(他動四段) 廻らしむる。●めぐらす。

まか 摩訶(形) 梵語。◎大なるの意。●多きの意。●勝れたるの意。○「摩訶般若」「摩訶不可思議」

まが 禍(名) わざはひ。●災難。●凶事。●惡事。(古)

まがひィ 紛(名) 〔一〕紛ふ事。〔二〕紛ふ樣に造りたる品物。●僞物。●贋造品。

まがひィ 蹟(名) 手足にてする麁相。●つまづき。(祝詞式)

まかぢ 眞楫(名) 眞は美稱。かぢに同じ。(歌詞)

まがり (名) 〔一〕鍋などの類にて飲食物を煮沸かす古代の器。○空穗「酒、樽に入れてすゑてまがりして沸かしつゝ飲ます」〔二〕柄杓の古名。○夢相國師百首「奥山の荒木のまがり其まゝに漆つければはげいろもなし」

まがり 曲(名) 曲る事。●曲り工合。

まかりいづ 退出。罷出(自動下二段) 〔一〕貴人の處より退く。●退出する。(雅)。〔二〕轉じては貴人の處に行く。●參上する。(俗)

まかりばん 退盤(名) 供御の御膳具を載せて下ぐる盤。

まかりぢ 退路(名) 死にて行く道。(續紀宣命)

まかりがね 曲尺(名) かねざしに同じ。

まがりもち 糳餅(名) 古代菓子の名。麥粉を葛などのやうに曲げうねらせて油揚にしたるもの。

まかりまうし 罷申(名) 暇乞。●告別。

まかりまうす 罷申(自動四段) 暇乞をする。

まかる 罷(自動四段) 〔一〕貴人の處より退く。●退出する。〔二〕行く。……貴人の前にて言ふ詞。勅撰歌集は天皇の御前に奉れるものなれば常に此詞を用ひて云へり。「初瀬にまかりけるに」の類。〔三〕他人の前にて言ふ時。或る動詞の前に意味なく添へて。其人に對して敬語の意をあらはす詞。○「罷在り」「罷歸り」〔四〕死ぬる。

まかる　頁（自動四段）　物の價を安くする。

まがる　曲（自動四段）　折れ屈む。●ゆがむ。●傾く。

まがほ　眞顏（名）　まじめな顏。●本氣の顏。

まかは　瞼。目皮（名）　まぶた。（源氏）

まかかみ　禍神（名）　まがつびに同じ。

まかよふ　（自動四段）　目にかゞよふ。●かゞやく。●きらきらする。○山家集「月もまかよふ白菊の花」

まかだち　（名）　侍嫗。●腰元。（記）

まがたま　勾玉（名）　玉の一種。巴の形をなしたるもの。（圖）

まかづ　（自動下二段）　罷り出づる。●退出する。○祝詞式「參りまかづる人の」

まがつみ　（名）　まがつびに同じ。

まがつび　禍津日（名）　（一）神の名。世の災厄凶事を司る神。（二）わざはひ。●災難。●凶事。

まがね　眞金（名）　（一）鐵。（二）黃金。

まがねふく　眞金吹（名）　催馬樂の曲名。

まがねふく　金曲吹（枕）　眞金を鞴（ふいご）にて吹くの意。古へ丹生（にふ）（地名）吉備（きび）（今の備前備中備後）などよりは金を產せし故その枕詞に用ふ。

まがな　眞鉗（名）　鉗（かんな）。（萬葉）

まがな　眞假名（名）　楷書もしくは行書にて書きたる假名。……いを以と書きろを呂と書くの類。

まかなひ　賄（名）　（一）食物を調理配付する事。（二）其調理配付せられたる食物。（三）其調理配付をなす人。（四）配膳。●給仕。○空穗「其日影の御まかなひには仁壽殿の女御」源氏「御酒まかなひに中務の乳母さぶらひて」

まかなひのかみ　賄の髮（名）　古へ禁中にて配膳の役を勤むる女官は髮を結び上げたり。其髮をいふ。（枕）

まかなふ　賄（他動四段）　（一）取り繕ふ。●取り揃へる。●整頓する。●準備する。○空穗「いかでか御文たてまつらばやとて御硯紙など取りまかなし奉り給へば」（二）食物を調理配付する。●食物を進め給仕する。

まがなし　（形。形狀言シク活）　かなし。●かわいそうである。（萬葉）

まがなもち　眞鉗持（枕）　弓削（ゆげ）（地名又は姓）の枕詞。鉗もて削るといひかけたり。

まかんづ
まがこふ
退出(自動下二段)　まかりいづに同じ。
(自動四段)　〔一〕亂るゝ。●混亂する。●入り交じる。〔二〕眞物と見違へらるゝ。

まがごふ
(他動下二段)　まがはしむる。

まがまがし
(形。形狀言シク活)　不吉らし。●えんぎのわるい。●けたいな。

まかげ
目蔭(名)　遠く物を見る時又はまばゆき時など眼の上に手を翳す事。(雅)

まかぶら
眶(名)　まぶた(字治)

まがこと
禍事(名)　まがに同じ。(古)

まかごや
眞麗矢(名)　眞は美稱。かごやに同じ。

まかでおんじやう
退出音聲(名)　古へ禁中にて節會の日。伶人庭上にて樂を奏し。式終はりて退出する時に奏する音樂。

まかき
籬(名)　目の荒き垣。●垣。

まがみ
眞神(名)　狼の一名。(古)

まかみふる
眞髮觸の意にて櫛にかゝる枕詞。○(枕)　紀「まがみふる櫛稻田姫」

まかす
負(他動四段)　負けさする。

まかす
任(他動下二段。又は四段)　〔一〕成り行く儘に捨て置く。●他のする通にさせておく。〔二〕或事柄を或人に任す。●委任する。

まかす
(他動下二段)　水を引く。○風雅「眞菅おふる荒田に水をまかすればうれしがほにも鳴く蛙かな」

まよ
繭(名)　繭に同じ。(古)

まよひィ
迷(名)　迷ふ事。●まぎるゝ事。●亂るゝ事。

まよひィ
紕(名)　糸のほつれ。●そゝけ。○萬葉「今年ゆく新ささもりが麻衣肩のまよひは誰か取り見ん」

まよひィご
迷兒(名)　道に迷ひたる小兒。

まよはす
迷(他動四段)　迷はしむる。

まよふ
迷(自動四段)　〔一〕どちらとも判斷し兼ねて困る。●惑ふ。〔二〕愚ぼぬ方に誤りて行く。●道を失ふ。〔三〕まがふ。●まぎるゝ。●みだるゝ。●縱横に行き違ふ。〔四〕物事の度に過ぐる。●多きに過ぐる。

まよふ
紕(自動四段)　糸のほつるゝ。●そゝける。○源氏「御しとねの少しまよひたるつまより淺綠の薄樣なる文のおし置きたる端見ゆるを」

まよけ
魔除(名)　惡魔を除くるための呪。

まよびき 眉引(名) 女の眉墨を引く事。●眉墨。……

また 朕(名) 常に遠出の形容に用ふ。〈古〉〔一〕一本の物の分れて二つとなりたる處。○「木の朕」「川の朕」〔二〕特には人の股の間。

また 又(副) 外に。●其上に。●他に。●重ねて。●再び。●これも。

まだ (副) 〔一〕いまだなほ。〔二〕此上になほ。○「まだある」

またいとこ 又從弟(名) わが父母の從弟。●己が從弟の子。

またばえ 又生(名) ひこばね。(夫木)

またがる 跨(自動四段) 兩方に足踏み掛くる。

またがし 又貸(名) 借りたる物を又他に貸す事。

またたく 瞬(自動四段) 〔一〕まばたきをする。〔二〕燈の風にあたる。●燈の消えんとして暗くなる。○源氏「夾はほのかにまたゝきて」〔三〕暫し生き殘る。◎燈の消えんとして猶消えざるに喩へたる詞。○源氏「若君のらふたくあはれにもおぼしますを黄泉路のほだしにもてわづらは聞えてなんまたゝき侍るとい

またたき ひつゞくれば」

またたび 瞬(又) まぶたとまぶたを叩くやうに合はす事。●まばたき。

まだれ 木天蓼(名) 灌木の名。實は猫の藥として用ふるもの。

またぞろ 麻垂(名) 漢字の麻、鹿、などの广の部分の稱。

またね 又候(副) 又々。●かさねて。●又しても。

またなし 又寐(名) 一度起きて又寐る事。●二番寐。

まだら 又無(形。形狀言ク活) 他に類なし。●又と外になし。

斑(名) 異なる色の入り交る事。●ぶちく。△(形)—まだらの。(又)—まだらなる。〔副〕—まだらに。

まだらゆき 曼陀羅(名) まんだらに同じ。

斑雪(名) 地上のまだらに見ゆるまで薄く降りたる雪。

またトふ (他動四段) 待つの延音。〈古〉

またうつし 又寫(名) 寫しの寫し。

またの 又の(形) 〔一〕次の。●翌。○「又の朝」「又の年」〔二〕他の。●別の。○「又の名」

またのや 股野矢(名) 矢の一種。雁股の異名。(東鏡)

またく（自動四段）急ぐ。○古今「いつしかとまたく心を脛にあげて天の河原を今日や渡らん」

またぐ（他動四段。又下二段）兩方に足踏み掛くる。●またがらしむる。

またぐら（名）人の朕。

またま（名）玉。●よき玉。

またまた又又（副）かさねく。●ふたゝび。

またまづら眞玉葛（名）玉の如く卷きたる葛。（萬葉）

またまつく眞玉附（枕）眞玉附くる緒といふ意を遠に掛けたる枕詞。○萬葉「またまつく遠の管原」

またまなす眞玉成（副）（形）眞玉の如く大切に。○萬葉「またまなす我思ふ妹」

またけ眞竹（名）普通の竹。

またげらい又家來（名）家來の家來。●陪臣。

またぶり（名）木の朕。（源氏）

またぶりづゑ（名）朕ある木にて作れる杖。（字治）

またぶし又臥（名）またねに同じ。

まだき（副）未だ其時の來らぬ先に。●未だ其事の熟せぬ内に。○後拾遺「櫻花まだきな散りそ何により春をば人の惜しむとか知る」（又）—まだきに。

またみる朕海松（名）朕の多く付きて生じたる海松。○萬葉「朝なぎに來よる深海松。夕なぎに來よる朕海松」

またし全（形。形狀言ク活）まったしに同じ。●完全なる。

まだし（形。形狀言ク活）まだきである。●いまだ其時の來らぬ。●いまだ其事の熟せぬ。○新續古今「月は入り朝日はまだき中空の暗きにまどふ人ぞいなしき」

またしても（副）又そろ。●又々。●かさねて。

まだしも（副）どちらかといへば此方が先づ。

またび朕火（名）朕の下に火を置きてあたる事。

またび眞旅（名）一二泊の旅に對して長き旅をいふ。（萬葉）

まだす（他動四段）たてまつる。●献上する。○萬葉「月讀の持てるをち水いとり來て君にまだしてをちえしむもの」

まれ稀（名）常に無き事。●めづらしき事。●たまさか。△（形）—稀の。（又）—稀なる。（副）—稀に。

まれらに　（副）　稀にに同じ（雅）

まれまれ　稀々（副）　まれに。●たまに。

まれびと　稀人（名）　まろうど。●賓客。

まそほが　眞赭（名）　そほに同じ。赤土。○萬葉「佛つくる眞赭足らずは」

まそほがの　眞赭の（名）　色の赤き……多薄くの事に用ふ。○堀川「花すゝきまそほの糸をくりかけて絶えずも人を招きつるかな」長方卿集「すがるふす栗栖の小野の糸薄まそほの色に露や染むらん」

まそほがのすすき　眞赭薄（名）　穂の出づる時に色の赤き薄。ますほのすゝきともますうのすゝきともいふ。皆同じものなり。（歌詞）

まそかがみ　（名）（枕）　ますかがみに同じ。

まそみのかがみ　（名）　眞澄の鏡に同じ。

まつ　松（名）　〔一〕木の名。常盤木の首位を占めて千年の齢を保つと言ひ傳へたるもの。〔二〕松明。〔三〕松薪。〔四〕松の内。

まつ　末（名）　細末。●粉。

まつ　待（他動四段）　來るべき物事を望む。●見合はせて居る。

まつ　先（副）　〔一〕最初に。第一に。〔二〕其前に。●先だちて。〔三〕●暫時。●まあ。

まつろ　末路（名）　〔一〕人の行末。〔二〕零落したる時。●運の傾きたる時。

まつろふ　（自動四段）　從ふ。●服する。（古）

まつろふ　（他動下二段）　從はしむる。●服せしむる。（古）

まつばがみ　松葉紙（名）　紙の一種。昔し出羽の國より産せしもの。

まつばら　松原（名）　松の木の立ち並びたるところ。●松林。

まつばやし　松囃子（名）　足利義政の頃行はれたる祝言の樂曲。猿樂の類。

まつと　（名）　眞人に同じ。

まつち　（名）　英語マッチ。火を擦りて火を發する附木。●摺附木。

まつちゃ　末茶（名）　挽茶に同じ。

まつり　祭（名）　〔一〕神を祭る事。●祭禮。●祭典。〔二〕特には加茂の葵祭。

まつりごとこう　政所（名）　〔一〕政務を執る役所。〔二〕特には院廳。

まつりだす　（他動四段）　まつりまたすの略。○たてまつる。（萬葉）

まつりのにはゾ　祭場（名）　祭式を執行する場所。●さいぢゃう。

まつりや　祭屋（名）　祭式を執行する家。

まつりごと　政（名）　政事。●政務。

まつりごとどの　政殿（名）　政務を執る所。

まつりごとどころ　政所（名）　政務を執る役所。

まつりごとのにはゾ　政場（名）　政務を執る役所。

まつりごとや　政屋（名）　政務を執る役所。

まつりごとびと　（名）　官名。＝じょうに同じ。●神祇官にては祐。●省にては丞。●彈正臺にては忠。●勘解由使にては判官。●職にては進。●寮にては允。●司にては祐。●内膳司にては典膳。●近衛府にては將監。●兵衛、衛門府にては尉。●内侍司にては掌侍。●太宰府にては監。●鎮守府にては軍監。●國司にては掾。●郡司にては主政。●家にては從。

まつりごつ　（自動四段）　政を行ふ。●政務を執る。（雅）

まつる　祭。祀（他動四段）　〔一〕神佛に仕ふる式を行ふ。●供物などを捧げて神佛の靈を慰むる。〔二〕神佛の靈を鎮座せしむる。

まつる　奉（他動四段）　たてまつる。●進上する。●まねらする。

まつる　奉（助動四段）　たてまつるに同じ。○「仕へまづる」「おくりまつる」

まつはゥる　纏（自動下二段）　〔一〕まきつく。●からまる。〔二〕常に其人の左右を離れずに居る。

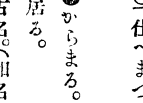
まつはゾしのうへゥのきぬ　（名）　縫腋（ほうえき）の袍の古名。（和名抄）

まつはゥす　（他動四段）　〔一〕纏はしむる。〔二〕常に我身の左右に在らしむる。

まっか　眞赤（名）　最も濃き赤さ。△（形）—眞赤な。（副）—眞赤に。（俗）

まづかひィ　問使（名）　使に同じ。（萬葉）

まつかはゥびし　松皮菱（名）　紋の名。【圖】



まつがね　松根（名）　松の根。●松のもと。

まつかさ　松笠（名）　松の實。●まつふぐり。

まつがさね　松襲（名）　重（かさね）の色目の名。表萌黄、裏紫。

まつかぜ　松風（名）　〔一〕松を吹く風。〔二〕古代の琴の名。

まつよひ　待宵(名)　(一)陰暦十四日の夜の月。◎明日の滿月を待つの意。(二)特には八月十四日の月。(三)來る人を待つ夜。

まつだい　末代(名)　末の世。●後世。●後代。

まつたけ　松茸(名)　菌の一種。松山に生じて香氣殊に高く美味なるもの。

まったし　全(形。形狀言ク活)　不足なくある。●充分である。●完全である。

まつらをり　松浦折(名)　折烏帽子の一種。

〔圖〕

まつむし　松虫(名)　秋鳴く虫の名。りん〳〵と鳴くもの。

まつのうち　松内(名)　門松節のある内の意。◎一月元日より七日までの間。

まつのけぶり　松煙(名)　墨の異名。

まっくろ　眞黑(名)　眞の黑さ。△(形)—眞黑な。(副)—眞黑に。(俗)

まっくら　眞暗(名)　眞の闇。●最も甚しき暗さ。△(形)—まっくらな。(副)—まっくらに。(俗)

まつやに　松脂(名)　松より出づる脂。

まつやま　松山(名)　松林のある山。

まつま　眞妻(名)　眞の妻。(萬葉)

まつげ　睫(名)　瞼(まぶた)に生じて眼中に物の入るを防ぐ爲の毛。

まつぶぐり　(名)　松笠。

まつご　末期(名)　死なんとする時。●臨終。●今は。

まっかう　眞向。眞甲(名)　額の處。○「太刀まっかうにふりかざし」

まっかう　末額(名)　古代左右近衛武官の用ひたる服飾の一つ。平絹の類にて三角形に作り鉢卷の如く額の處にあつるもの。又舞樂、打球、樂春庭花等の舞人も之を着することあり。

まつざ　末座(名)　座席の末。●末席。

まっさを　眞青(名)　最も濃き青さ。△(形)—眞青な。(副)—眞青に。(俗)

まつじ　末寺(名)　其寺の配下の寺。

まづし　貧(形。形狀言シク活)　(一)乏しい。●少なし。(二)金錢の乏しき。●貧乏である。

まづし　(形。形狀言ク活)　拙なし。●味のよからぬ。

まっしょ　末書(名)　註釋の書物。

まっしぐらに　早く走る有樣。

まっかう　抹香(名)　香の一種。佛前にて焚く下等の品。

まっしゃ 末社(名) 〔一〕其神社に附屬せる小社。〔二〕子分。●眷屬。

まっしゃづきん 末社頭巾(名) 狂言裝束の名。神能にて末社の神體の現はるゝ時などに用ふるもの。(圖一、二)

まっぴら 眞平(副) 平にを強めていふ詞。○「眞平御免」

まっせ 末世(名) 〔一〕末の世。●後世。〔二〕佛敎にては釋迦の在世に對して現世を云ふ。

まっすぐ 眞直(名) 少しも曲からぬ事。△(形)—まっすぐなる。(副)—まっすぐに。

まね 眞似(名) 眞物らしく見する事。●模樣。

まねく 招(他動四段) 手などを上げ動かして人を呼ぶ。●呼ぶ。●招待する。

まねぶ (他動四段) 〔一〕眞似する。●學ぶ。〔二〕有の儘に告ぐる。●語る。(雅)

まねき 招(名) 招く事。●招待。

まねし (形。形狀言ク活) 多し。●繁し。○萬葉「矢形尾の鷹を手にする公三島野に狩らぬ日まねくなりぬ」

まな 眞名(名) 漢字。……假名に對して。

まない 眞魚(名) 魚。……料理に用ふる時の稱。

まないた 俎(名) 魚を料理するに用ふる臺の板。

まなばし 眞魚箸(名) 正式に魚を料理する時左の手に持ちて魚を抑ふる箸。

まならし (名) 鶴鴿の古名。(記)

まなはじめ 眞魚始(名) まなのいはひに同じ。

まなか 眞中(名) まんなか。●中央。●中心。

まなかひィ (名) 眼と眼の間。●目さき。(萬葉)

まながる (自動四段) 互に手を組みて抱き合ふ。(記)

まながつを 眞鰹(名) 魚の名。鰹の一種。(和名抄)

まながふら 眶(名) まぶた。(和名抄)

まなづる 眞鶴(名) 〔一〕鳥の名。鶴の一種。白鶴又は丹頂。

まなむすめ 愛娘(名) 最愛の女子。●かわゆがり娘。

まなのいはひィ 眞魚祝(名) 小兒三四歳の時初めて魚肉を食はしむる祝。●魚味の祝。●まなはじめ。

まなぐひィ 眞魚咋(名) 魚肉の料理。(記)

まなくり 眞魚廚(名) 魚を料理する所。(字鏡)

まなぶ 學(他動四段。又上二段) 學問する。●稽古す

る。●習ふ。●研究する。○萬代「千度まで〻まうで〻祈るしるしあらば學ぶる道に冥加あらせ給へ」

まなぶた 瞼(名) 眼の蓋の意。◎まぶた。(和名抄)

まなぶみ 眞名文(名) 漢文。

まなこ 眼(名) 〔一〕眼球。〔二〕目。〔三〕物事の主たる點。●眼目。

まなご 愛子(名) 愛子。●愛子。●秘藏子。(雅)

まなご 眞砂(名) まさごに同じ。(雅)

まなこゐ 眼居(名) 眼の檳子。●目附。(雅)

まなし 間無(形。形狀ク活) ひまなし。●透間なし。

まなじり 眥(名) 目尻。

まなしがつま 目無籠(名) 目の無き程に細かく編みたる籠。(記)

まなび 學(名) 學ぶ事。●學問。●稽古。

まらびと 客人(名) まらうど。●きゃく。

まん 滿(名) 滿ち足る事。○「滿は損を招く」「滿七ヶ年」

まん 慢(名) 驕に同じ。

まん 萬(數) 千の十倍。●よろづ。

まんいち 萬一(副) 萬に一つ。●若しも。

まんろく 漫錄(名) 漫筆に同じ。

まんぱち 萬八(名) 虛言。

まんべんなし (形。形狀ク活) 行き屆かぬ處なし。

まんど 萬度(名) 伊勢大神宮にて一萬度の祓を執行せし祓串の箱。●祓箱。

まんどう 萬燈(名) 〔一〕數萬の燈火。〔二〕角行燈に柄を貫き祭禮の夜子供などの持ちあるくもの。

まんどころ 政所(名) 〔一〕政務を行ふ廳。〔二〕特には鎌倉幕府にて政令を出だす役所。〔三〕攝政關白の人の妻又は母。

まんてう 滿潮(名) 〔一〕滿ちたゝへたる潮。〔二〕大潮。

まんちゃく 瞞着(名) 欺く事。●くろむる事。△(動)—瞞着す。

まんぢゅう 饅頭(名) 餅の一種。餡飩紛に餡を入れて蒸したるもの。おもに佛事などに用ふ。

まんりき 萬力(名) 仕掛にて重き物を動かし。又は强く抑へなどする道具。

まんかい 滿開(名) 花の十分開く事。△(動)—滿開す。

まんえふがな 萬葉假名(名) 眞假名に同じ。◎萬葉

集に多く用ひたる假名なれば云ふ。

まんだら 曼陀羅(名) 〔一〕極樂淨土の實境を畫がきたる圖。〔二〕種々に彩り作りて佛前に懸けおくもの。

まんだらげ 曼陀羅華(名) 草の名。朝鮮朝顔の一名。

まんぞく 滿足(名) 十分に滿ち足る事。〔二〕滿ち足れりと思ふ事。……△(動)—滿足す。

まんな (名) 眞名に同じ。

まんなか 眞中(名) まなかに同じ。

まんのう 萬能(名) 種々の藝能。

まんぐわん 滿願(名) 時日を限りて神佛に祈願せし日の滿つる事。

まんま (名) 飯をいふ。小兒の詞。

まんまと (副) うまく。●上首尾に。

まんまる 眞丸(名) 眞の圓形。

まんまん 漫漫(名) 水の廣々としたる有樣。(又)—漫々と。

まんまく 幔幕(名) 幔に同じ。

まんげつ 滿月(名) 陰曆十五夜の月。

まんぷく 滿福(名) 多量の幸福。

まんぷく 滿腹(名) 腹一杯になる事。△(動)—滿腹す。

まんごふ 萬劫(名) 無量の年數。……劫を見よ。

まんがうがしゃ 萬恒河沙(名) 恒河(天竺の川の名)にある數萬の沙の意にて常に數の無量なる喩に用ふ。=恒沙に同じ。

まんえん 蔓延(名) 蔓草の如く漸々擴がりゆく事。●はびこる事。△(動)—蔓延す。

まんざ 滿座(名) 〔一〕其席に多人數一杯座し居る事。〔二〕其席に一杯座し居る人。

まんざい 萬歲(名) 〔一〕よろづの年。●萬年。〔二〕年の始に烏帽子素袍を着し鼓を打ちて家毎に祝言の唄を歌ひあるく者。

まんざいらく 萬歲樂(名) 雅樂の曲名。

まんざら (副) まるで。●少しも。(俗)

まんさん 滿山(名) 其山に滿つる事。

まんさん 滿參(名) 神佛に祈願して參詣する日數の滿つる事。

まんさく 滿作(名) 作物のよくみのりたる事。●豐作。●豐年。

まむき 眞向(名) 正面に同じ。

まむぎ 眞麥(名) 小麥の古名。(和名抄)

まむし 蝮蛇(名) 虫の名。蛇の一種にして齒に大なる

毒を含有す。

まんじ 萬字(名) 佛法の記章として用ふる一種の紋。天竺の萬の字の形をかきたるもの。〔圖一二二〕

まんしん 慢心(名) おごり高ぶる心。●高慢心。

まんじん 慢心(名) おごり高ぶりて佛法を信ぜぬ心。……天狗に云ふ。(佛教)

まんじゅうらく 萬秋樂(名) 雅樂の曲名。

まんじゅらく 萬秋樂(名) まんじうらくに同じ。

まんじゅしゃけ 曼珠沙華(名) 草の名。彼岸花の一名。

まんび 萬眉(名) 能面の名。女に用ふるもの。

まんぴつ 漫筆(名) 不順序に書き散らしたる文章。●隨筆。

まんびき 萬引(名) 商家にて物を買ふ體に見せて盜み取る事。又之をなす人。

まんせい 慢性(名) 容易に治し難き病氣のたち。●痼疾。

まんず 慢(自動サ變) 慢心になる。

まんずらく 萬秋樂(名) まんじうらくに同じ。

まむすび 眞結(名) 紐の結び方の名。=こまむすびに同じ。

まう もうの處を見よ。

まふ 舞(自動四段) 〔一〕舞を爲す。●舞曲を奏する。〔二〕さはる。

まのあたり (副) 目の前に。●眼前に。●直接に。

まのし (名) 目を伸ばして見あぐる事。(宇治)

まのす (自動四段) まのしをする。

まく 幕(名) 〔一〕絹、布など縫ひ合はせ廣くして物の隔などに掛け又は引くもの。〔二〕能樂にては樂屋より橋掛に出る際に掛けたる幕。〔三〕芝居にては一段終はる毎に舞臺と見處との隔に引く幕。〔四〕芝居の一段。すなはち幕の明きたる間。〔五〕芝居の休息の時。すなはち幕の閉ぢたる間。〔六〕相撲にては高等の力士の詰め居る處を隔つる幕。

まく 膜(名) 人體にて皮の內の內を包みたる源皮。

まく 卷(他動四段) 〔一〕織物、紙、繩などの如きものを一端より內に內にと曲げ入るゝ。〔二〕纏ふに同じ。●卷き付くる。〔三〕枕にする。

まく 蒔。撒(他動四段) 〔一〕散らし掛くる。●撒布する。〔二〕植物の種を地上に植うる。〔三〕蒔繪する。

まく
負(自動下二段)　〔一〕勝を他人に取らるゝ。●敗北する。〔二〕價を安くする。

まく
設(他動下二段)　設くに同じ。

まく
(助動)　ましの變化。○「掛けまくもかしこき」

まぐ
(他動四段)　〔一〕求むる。●尋ぬる。●搜す。○紀「國まきとほりて」記「妻まぎかれて」〔二〕轉じては女を奪ふの意。○宇治「人の妻まぐものあり」

まぐ
曲(他動下二段)　曲らする。

まぐひィ
眞杭(名)　抗に同じ。(萬葉)

まくろ
眞黑(名)　まっくろに同じ。△(形)—まくろなる。(副)—まくろに。

まぐろ
鮪(名)　魚の名。しびに同じ。

まぐばひィ
(名)　まぐはひの訛り。

まぐばる
(他動四段)　くばる。●配當する。(雅)

まぐち
閭口(名)　宅地又は建物の前面の幅。

まくり
(名)　海草の名。生兒の胎毒を下す藥として煎じ飲まするもの。

まくりで
(名)　〔一〕手先を屈め袖を内の方に卷き折る事。●卷袖。○六帖「いかにして戀をかくさん紅の八入の衣まくりでにして」〔二〕袖をまくりあげて腕を出す事。●腕まくり。

まくる
(他動四段)　卷く。●卷きあぐる。●はぐる。

まくる
(自動下二段)　卷かるゝ。●卷きあがる。●はぐれる。

まぐはゥ
馬鍬(名)　農具の名。馬に挽かせて水田を耕す鍬。

〈圖〉

まぐはひィ
(名)　〔一〕目を見合はす事。●見合。〔二〕男女の交合。

まくはゥうり
眞桑瓜(名)　瓜の一種。味甘くして夏の頃賞味せらるゝもの。

まぐはゥし
(形。形狀言シク活)　美し。●たへなり。(古)

まぐそ
馬糞(名)　馬の大便。

まくなぎ
蠖螟(名)　虫の名。かつをむしに同じ。小虫にて飛び散るもの。

まくなぎ
(名)　目くばせする事。(源氏)

まくら
枕(名)　〔一〕寢る時頭を支へしむるもの。〔二〕物事の頭の方。

まくら　眞暗(名)　まっくらに同じ。△(形)—まくらなる。(副)—まくらに。

まくら　臣等(代)　臣下の君主に對して自ら稱する詞。●私共。

まくらがたな　枕刀(名)　枕太刀に同じ。

まくらがの　(枕)　古河(こが)(下總の地名)の枕詞。意詳ならず。(萬葉)

まくらがみ　枕紙(名)　枕の括りを被ひ包む紙。

まくらがみ　枕上(名)　枕元に同じ。

まくらだち　枕太刀(名)　枕元に守に置く太刀。

まくらざうし　枕草紙(名)　〔一〕寐ころびながら慰に見る本。隨筆小説の類。○新六帖「さちおける枕ざうしの上にこそ昔語りの夢は見えけれ」〔二〕春畫。

まくらつどへに　(副)　枕の邊に集まりて。○堀川「思ふ事なぐさむばかり語らばや寐覺の床の枕つどへに」

まくらづく　枕付(枕)　妻屋の枕詞。妻屋は夫婦相寐る處ゆゑ枕を並べ付くるの意にて續けたり。(萬葉)

まくらく　(他動四段)　枕にする。(雅)

まくらこと　枕言(名)　寐話。●寐物語。

まくらことば　枕詞(名)　和歌の五字の句の處に置きて次の句の或る詞に冠らしむる序詞。「久方の天」「ちはやぶる神」「ぬば玉の夜」「菅の根の長き」「刈薦の亂るゝ」の類……序詞との別は。枕詞は既に古格となりて一定せるものを云ひ。序詞は新しく製造して用ふるも自由なるの點にあり。……序詞を參考せよ。

まくらゑ　枕繪(名)　春畫。

まくらびやうぶ　枕屏風(名)　屏風の一種。枕元に立つる爲めの低きもの。

まくらびき　枕引(名)　枕を引き合ひて勝負を決する遊戯。

まくらもと　枕元(名)　寐たる時の枕の近邊。●まくらもみ。

まぐん　魔軍(名)　惡魔の軍勢。(佛教)

まくのうち　幕の内(名)　高等なる相撲取の稱。昔し相撲上覽の時。技術の優れたるものを撰びて幕の内に伺候せしめたるより起れる名。

まくぐし　幕串(名)　幕を張る爲めに立つる棒。

まくや　幕屋(名)　幕を引きめぐらしたる小屋。

まくさ 眞草(名) 〔一〕屋根に葺く草。〔二〕藻。
まぐさ 秣(名) 牛馬の食料とする草。
まぐさ 楣(名) 家の門の上に渡す横木。
まくさかる 眞草刈(枕) 荒野の枕詞。(萬葉)
まくも 莫目。莫牟(名) 古代高麗樂の樂器。吹物の一種。但し其形詳ならず。
まくず 眞葛(名) 葛の美稱。(歌詞)
まや 馬屋(名) 厩(うまや)に同じ。
まや (名) 〔一〕あづまや。〔二〕粗造なる家。●賤が屋。……(雅)
まま 儘(名) 其通りにする事。●其通りにして置く事。●思ふ通りにする事。
まま 繼(名) 實ならぬ親子兄弟等をいふ。
まま (名) 飯。小兒の詞。
まま (名) 乳母。(雅)
まま 間(副) 時々。●しば〳〵。
ままはは 繼母(名) 義理の母。
ままちち 繼父(名) 義理の父。
ままおや 繼親(名) 義理の父母。
ままむすめ 繼娘(名) 義理の娘。
ままこ 繼子(名) 義理の子。
ままごと 飯事(名) 割烹煮炊の眞似をする女兒の遊戯。
ままき 繼木(名) ままきの弓の略。
ままきのや 繼木矢(名) 繼木の弓に用ふる矢。角、木、錫などにて鏃を造りたるもの。
ままきのゆみ 繼木弓(名) 木と竹とを繼ぎ合はせたる弓。
ままきゆみ 繼木弓(名) ままきの弓に同じ。
まけ 負(名) 敗北。
まけ 任(名) 任ずる事。●任命。○續紀宣命「大君のまけのまに〳〵」
まげ 髷(名) 髮の毛を綰ねて結びたるもの。●わげ。
まげいほ(ヵ) 曲庵(名) まがりたる庵。●賤が屋。(雅)
まけをしみ 負惜(名) 負けたる人の猶屈伏せずして強情を張る事。
まけわざ 負業(名) 中古の俗。勝負事に負けたる連中の負擔として勝ちたる人を饗應する事。
まけがた 負方(名) 〔一〕勝負事に負けたる組。〔二〕大方負に極まりたる場合。
まけて (副) 強ひて。
まけじだましひ(ィ) (名) まけじ心に同じ。

まけじごころ　（名）　人に負けじと思ふ心。●負けぬ氣。●勝氣。

まげもの　曲物（名）　わげものに同じ。

まふ　麻布（名）　麻の布。

まふ　マウと發音する詞はまうの處にあり。

まぶ　間夫（名）　まをとこ。●情夫。

まぶち　眶（名）　眼の緣。●まなかぶち。

まぶかに　目深に（副）　目の隱るゝ位深く。

まぶた　瞼（名）　眼の蓋となる皮。

まふくた　（名）　山伏（夫木）

まぶし　射翳（名）　獵師の山中にて鹿など射る時。其身を隱すために立つる木の折枝。

まぶし　（名）　目つき。（源氏）

まご　孫（名）　子の子。

まご　馬子（名）　馬方。●馬の口取る男。

まこと　眞。誠（名）　〔一〕僞なき事。●事實。●眞實。〔二〕僞なき心。●眞實の心。●信（しん）。〔三〕僞なき言語。●眞實の言葉。

まこと　（副）　〔一〕まことに。〔二〕急に物を思ひ出したるの時にいふ詞。●ほんに。

まごと　眞言（名）　眞實の言葉。

まことは　（副）　實は。●本とは。

まことや　（副）　急に思ひ出したる時にいふ詞。●ほんに。○源氏「まことやかの宇治の大いどの〻御むすめの。

まことし　（形。形狀言シク活）　〔一〕誠である。●事實である。○徒然草「ありたきことはまことしき文の道」〔二〕誠らし。●事實らし。誠らしき有樣。●事實らしき有樣。△（形）—まことしやかなる。（副）—まことしやかに（雅）

まことしやか

まことす　（自動サ變）　實を語る。●うそをつかぬ。○宇治「女はまことしけるものを」

まごち　眞東風（名）　眞東より吹く風。

まごふ　萬劫（名）　まんごふに同じ。（堀川）

まごのて　孫の手（名）　木竹などにて手先の形に作り長き柄を附けて背中を搔くに用ふるもの。

まごやし　苜蓿（名）　草の名。＝うまごやしに同じ。

まごころ　眞心（名）　誠實の心。●本心。

まごじらう　孫二郎（名）　能面の名。女に用ふるもの。

まごびさし　孫庇（名）　〔一〕庇より又掛け出して作れる庇。〔二〕孫庇の下にある室。

まこも　眞菰（名）　水草の名。菰に同じ。

まへ　前（名）　〔一〕目の方に最も近き處。●目前。●眼下。〔二〕後ならぬ方。〔三〕初の方。●今ま での時。〔四〕女の尊稱。●御前。○「千手の前」〔五〕分量。●ぶん。○「十人前」

まへいた　前板（名）　車の軾。

まへば　前歯（名）　口の前の方にある歯。

まへばり　前張（名）　前張の大口の略

まへばりのおほくち　（名）　大口を見よ。

まへおき　前置（名）　文章、演說等の本題に入る前に準備として先づ述ぶる事柄。

まへわ　前輪（名）　鞍の前の方に丸く立ちたる隔の板。……後なるをあとわ又しりわといふ。

まへかど　前廉（副）　其前に。

まへがり　前借（名）　給料手間賃などを勞働の前に借る事。●借越。

まへかた　前方（副）　以前に。●嘗て。

まへかけ　前懸（名）　衣の汚れを防ぐため膝の處に纏ひ垂るゝ切れ。●前垂。●膝懸。

まへがき　前書（名）　本文の前に書く文句。●序。

まへがみ　前髪（名）　〔一〕額の髪。●額に垂らしたる髪。〔二〕額の髪を元結にて結びて上ぐる事。〔三〕武家時代にては男子十四五歳まで前髪を結ひたる故其年齡の稱。

まへがしら　前頭（名）　相撲にいふ詞。關分の次に位する資格。

まへだれ　前垂（名）　前懸に同じ。

まへだて　前立（名）　〔一〕兜の目庇の上に立つる裝飾。〔二〕現今軍人の正裝に帽子の前頭に立つる裝飾。鳥の羽又は毛にて造りたるもの。

まへつぎみ　（名）　天皇の御前に伺候する故前の君の意。◎〔一〕公卿。●近臣。〔二〕大臣。

まへくづけ　前句附（名）　連歌、俳諧などにて下の句を先に出だし跡より逆に上の句を附くる事。

まへこし　前腰（名）　袴の腰の反對なる前の處。（著聞）

まて　（名）　左右の手。●兩手。●双手。

まて　蟶。馬蛤（名）　貝の名。兩殼合ひて細き竹の筒の如く首尾少しく細く平みたるもの。

まで　（後）　〔一〕物事の極處を示す詞。○「春より秋まで」「東京より横濱まで」〔二〕ほど。●くらぬ。○千載「冬來ては一夜二夜を玉笹の葉分の霜のところせきまで」

まで　（自動）　詣での略。○源氏「たびく、しきりてまで給ふ」

まてばしひィ　（名）　木の名。椎の一種にて葉も實も大なるもの。

までに　（後）　ほど。●くらぬ。○古今「朝ぼらけ有明の月と見るまでに吉野の里に降れる白雪」

まてがた　馬蛤潟（名）　海士どもの馬蛤貝を捕る潮の干潟。……此貝を捕る海士は干潟に立ちて潮のさしこぬ先にと急ぐさまの暇なきものなれば此意を和歌によみたるあり。○齋宮女御集「まてがたにかきつむ海人の藻鹽草煙はいかに立つらむや聞く」後撰「伊勢の海の海人のまてがたいとまなみながらへにける身をぞ恨むる」

まてがふ　（自動四段）　眞手結をする。○月詣集「御垣守まてがふ程は時鳥しばし雲井になのりしてゆけ」

まてつがひィ　眞手結（名）　てつがひを見よ。

まてく　（自動カ變）　詣で來に同じ。○後拾遺「人々まできて歌よみ侍りければ」

まあ　（副）　先づ。（俗）

まあ　（感）　驚きたる時の聲。（俗）

まさ　柾（名）　〔一〕木目の正しく通りたる材木。〔二〕柾目紙の略。

まざいらく　萬歳樂（名）　まんざいらくに同じ。

まさに　正に（副）　〔一〕正しく。●たしかに。〔二〕丁度。●あたかも。○「時まさに四月」〔三〕豈。●決して。○源氏「かく暮れなんにまさに動き給ひなんや」

まさりぐさ　（名）　菊の異名。

まさる　優。勝（自動四段）　すぐる。●上越す。●上位を占むる。

まさる　增（自動四段）　量の增す。

まざる　雜（自動四段）　入り交じる。●ごたくになる。

まさか　（副）　誠には。●よもや。○「まさかそうでもあるまじ」（雅）

まさか　（名）　〔一〕現在。○萬葉「梓弓末は寄巢むまさかこそ人目を多み名をはしにおけれ」〔二〕實際。

まさかり　眞盛（名）　眞の盛。●眞最中。△（形）—まさかりの。（副）—まさかりに。

まさかり　鉞（名）　斧の大なるもの。

まさかづら　（名）　まさきづらの略。（建保歌合）

まさつ　摩擦（名）　擦れ合ふ事。△（動）―摩擦す。

まさなごと　正無事（名）　つまらぬ遊戯。◆子供のたはむれ。

まさなし　正無（形。形状言シ活）　わるし。◆よくなし。

まさ〻ふ（ツ）　（自動四段）　ますの延音。◎ます。◆ます。◆います。○後撰「けふそくをおさへまさへ」

まさぐる　（他動四段）　手にて弄ぶ。◆おもちゃにする。（雅）

まさご　眞砂（名）　〔一〕細かき砂。〔二〕小さき石。

まさでに　（副）　まことに。◆正しく。（萬葉）

まさき　眞拆。正木（名）　蔓草の名。葉は常葉にして秋の末眞赤に紅葉するもの。

まさきづら　眞拆葛（名）　眞拆の葛。

まさきく　眞幸く（副）　幸福に。◆安全に。（古）

まさゆめ　正夢（名）　正しく實際と符合する夢。

まさめ　柾目。（名）　柾の木目。

まさめに　正目に（名）　正しき目にて。◆眼前に。◆たしかに。（古）

まさめがみ　柾目紙（名）　杉原紙の上等なるもの。

まさし　正（形。形状言シク活）　眞實である。◆實際である。

まさき　槇。眞木（名）　〔一〕杉。〔二〕檜。〔三〕高野槇。

まさき　薪（名）　たきゞ。

まさき　牧（名）　牧場。

まさき　卷（名）　〔一〕卷く事。◆卷きたるもの。〔二〕卷物。〔三〕書籍。

まざき　間木（名）　鴨居の上の木。

まきば　卷葉（名）　未だ全く開かずして卷きたる草の葉。

まきば　牧場（名）　牛馬など放ち飼ふ場所。

まきばしら　卷柱（名）　種々に彩色して卷き裝ひたる柱。○源氏表白「上品蓮臺に心をかけて七寶莊嚴の卷柱のもとに至らん」

まきばしら　槇柱（名）　槇の木にて作れる柱。

まきばしら　槇柱（枕）　太き心の枕詞。柱を太く立つると掛けていふ。（萬葉）

まぎる　紛（自動下二段）　〔一〕まがふ。〔二〕まぎれ隱るゝ。〔三〕慰む。

まきわり　薪割（名）　薪を割るに用ふる刄物。

まきわら　卷藁（名）　弓を射習ふ時。藁を卷き束ねて的

まきがり
巻狩(名)　多人數一同に四方より取巻きてする獵。

まきがみ
巻紙(名)　繼ぎ合せて巻きたる紙。手紙など書くに用ふ。

まきゃうたつ
魔境(名)　惡魔の境界。(佛教)
眞木立(枕)　眞木の生ひ立つの意にて荒山の枕詞。(萬葉)

まきぞへ
巻添(名)　他人の罪の係り合になる事。

まきぞめ
巻染(名)　絹、布などを絲にて巻きて染めたるもの。

まぎらはし
紛(形。形狀言シク活)　紛れ易き有樣。

まぎらはす
紛(他動四段)　紛るゝ樣にする。

まぎらかす
紛(他動四段)　紛るゝ樣にする。

まきのだつ
眞木の立(枕)　まきたつに同じ。

まきゑ
蒔繪(名)　漆塗の上に金銀粉にてかきたる繪または模樣。

まきえい
巻纓(名)　けんにいに同じ。

まきゑし
蒔繪師(名)　蒔繪をする職工。

まきさく
眞木拆(枕)　眞木を斧もて拆き作りたるの意にて檜にかゝる枕詞。○萬葉「まきさく檜のつまで」「まきさく檜の御門」「まきさく檜の板戸」

まきぬ
巻絹(名)　丸く巻きたる絹。

まきもの
巻物(名)　軸の一種。横に見る樣に造りたるもの。

まゆ
眉(名)　(一)眉毛。(二)眉墨。(三)立烏帽子の名所。前面の尖りたるひだの下に少し高く押し出したる所。

まゆ
繭(名)　蠶の糸もて丸く造り其中に自ら身を隱すもの。色は黃又は白にて俵の形をなす。

まゆはき
眉掃(名)　刷毛の一種。女の白粉を附けたるのち眉を掃ふもの。

まゆとじめ
眉刀自女(名)　(一)一說には主立つ女。一說には美女。(二)催馬樂の曲名。

まゆたま
繭玉(名)　繭の形したる餅を柳の枝に附けたに種々の翫弄物など結び下げたるもの。年玉の贈物などに用ふ。

まゆつくり
眉作(名)　眉墨を畫がく事。

まゆね
眉根(名)　眉の根。●眉。

まゆげ
眉毛(名)　眼の上に細く横にはえたる毛。●眉。

まゆみ
眞弓(名)　弓。

まゆみ 檀（名） 灌木の名。葉は槐に似て秋の末紅葉するもの。上古專ら弓に用ひたる故に此名あり。

まゆびき 眉引（名） まよびきに同じ。

まゆずみ 眉墨・黛（名） 眉毛を剃り落して別に額の處に墨もて畫かきたる眉。古へ公卿官女などのしたるもの。

まゆすび （名） 眞結。●こまむすび。（萬葉東歌）

まめ 豆（名） 〔一〕草の名。食用となるべき丸き實の莢の中に入りて生ずる植物。大豆、小豆、豌豆、蠶豆の類。〔二〕豆の實。〔三〕特には大豆。〔四〕豆ほどの小さき物。〔五〕手足に生ずる豆の如き腫物。

まめ （名） 〔一〕信實の心。●忠。●孝。〔二〕まじめ。●本意。●勤勉。●健やか。●達者。△（形）—まめなる。（副）—まめに。

まめいり 豆煎（名） 食品の名。米と豆とに砂糖を加へて煎りたるもの。

まめをとこ （名） 〔一〕忠實なる男。〔二〕女に眞情を交はす男。●實のある男。（伊勢）

まめだつ （自動四段） 忠實に立ち振舞ふ。●まじめになる。

まめつ 磨滅（名） 磨れて漸々と形のなくなる事。△（動）—磨滅す。

まめつき 豆搗（名） 黄粉（きなこ）の古名。（和名抄）

まめやか （副）—まめやかに。まめ〳〵しき有樣。△（形）—まめやかなる。

まめまはし 豆廻（名） 斑鳩（いかるが）の一名。

まめまめし （形。形狀言シク活） 忠實なる有樣。●まじめなる有樣。

まめぶみ （名） まじめなる手紙。●眞情をあらはす手紙。

まめごと （名） 〔一〕まじめなる事。〔二〕まじめなる言葉。（雅）

まめごころ （名） 忠實の心。（紀）

まめめいげつ 豆名月（名） 九月十三夜の月。……八月十五夜を芋名月といふに對して。枝豆の熟する時節故に云ふ。

まめびと （名） まじめなる人。

まみ 貘（名） 獸の名。狸に似て穴に住むもの。

まみ （名） 目つき。（雅）

まみる 塗（自動下二段） 塗らる〻。

まみづ　眞水(名)　普通の水。……鹽水に對して云ふ。●淡水。

まみゆ　見(自動下二段)　貴人に對面する。●拜謁する。

まし　麻紙(名)　紙の名。〔一〕麻布を切りて造れる紙(延喜式)〔二〕麻の皮にて造れる紙(同式)

まし　(名)　ましらの略。猿。

まし　增(名)　增さる事。●優る事。

まし　(代)　いまし。●汝。(雅)

まし　(助動。特狀)　推量の詞。んに似て重し。○「見なまし」「行かまし」

まじ　蠱(名)　まじものに同じ。

まじ　(助動。特狀)　推量の打消に用ふる詞。●まい。○「見るまじ」「行くまじ」

ましろ　眞白(名)　極めて白き事。●まっしろ。△(形)—ましろなる。(又)—ましろの。(副)—ましろに。

まじろく　(自動四段)　またゝきをする。

ましば　眞柴(名)　柴の美稱。

まじり　交(名)　交じる事。●混合。

まじり　眦(名)　目尻。

まじる　交(自動四段)　物と物と一所になる。●其物に親しく接する。

ましほ　眞汐(名)　汐に同じ。(天木)

まじはり　交(名)　〔一〕交際。〔二〕交合。

まじはる　交(自動四段)　〔一〕まじる。●まざる。〔二〕交際する。●附き合ふ。〔三〕交合する。

まじわざ　蠱事(名)　呪の事。●禁厭。

ましか　(助動)　ましの變化。○赤染衛門集「惜しむにし花の散らずば今日も只春ゆくとこそよそに見ましか」

ましかば　(助動)　ましの變化。●なりしならんには。○新古今「誰ゆきて君に告げまし道芝の露もろともに消えなましかば」

まじなひ　呪(名)　呪ふ事。●呪ふ法。

まじなふ　呪(他動四段)　神佛を念じて災難を逐ひ拂ふべき一種の奇妙なる方法を爲す。

ましら　(名)　猿の異名。(古今)

まじらひ　交(名)　交はり。●交際。●交情。

まじらふ　交(自動四段)　交じる。●交際する。

ましらげ　眞精(名)　上白米。

ましん　麻疹(名)　病の名。はしか。

まじん　魔神(名)　魔の神。

ましく　間尺(名)　寸法。●間。○「間尺に合はぬ」

まします　坐(自動四段)　おはします。●入らせらるゝ。

まじこる　(自動四段)　交じり凝る。●交じる。(祝詞式)

まして　(副)　其上。●まさりて。●まいて。

まじふ　交(他動下二段)　交じらする。●まぜる。

まじつ　魔術(名)　魔法。

まじめ　(名)　眞面目。●本氣。

ましみづ　眞清水(名)　清水に同じ。

まじもの　蠱物(名)　人を咀ひなごする一種の幻術。(續紀宣命)

まひ　痲痹(名)　しびるゝ事。△(動)—痲痹す。

まび　間日(名)　間の日。●中に隔てたる日。

まひろぐ　間廣(自動下二段)　一間中出し廣げる。●部屋中取り散らす。○枕「まひろげて指貫奉りつ」

まひと　眞人(名)　姓の一つ。

まびく　間引(他動四段)　間を引き拔く。●うろぬく。

まひくる　(自動下二段)　まことに日が暮るゝ。(萬葉)

まびさし　目庇(名)　兜の名所。目の上に出でたる庇の如きもの。

まびき　目引(名)　目色。●顏色。○著聞「御前のまびきに從ひて差し出づる人もながりけり」

まびしく　馬柄杓(名)　武家時代。馬丁の携へ居て途中にて馬に水飲ませる柄杓。

まもり　守(名)　〔一〕守る事。●守護。〔二〕守札。

まもりぼとけ　守佛(名)　其人を守護する佛。

まもりほんぞん　守本尊(名)　生れ年によりて其人を守護する佛。子の年の人ならば千手觀音、丑寅の年の人は虛空藏菩薩などの類。

まもりがたな　守刀(名)　身を守る爲めに所持する短刀。

まもらふ　(他動下二段)　守るの延音。

まもりふだ　守札(名)　神佛の名を書きたる札。身の守として携ふるもの。

まもりぶくろ　守袋(名)　守札を入るゝ袋。

まもりめ　守目(名)　番人。●監督者。○宇治「二人の子を舟のまもりめにのせおきて」

まもる　守(他動四段)　〔一〕番をする。●守護する。●護衛する。〔二〕同じ有樣にて置かしむる。●保護する。〔三〕見詰める。

ませ　笆(名)　ませがきに同じ。

ませば　(助動)　ましの變化。●たりしならんには。後

撰「夢路にも宿かす人のあらませば寐覺に露は拂はざらまし」

ませがき 笆垣(名) 籬に同じ。

ます 鱒(名) 魚の名。鮭に似て小さきもの。我北海の名産。

ます 桝(名) 〔一〕穀物、酒、醤油などの分量を量る四角形の器。〔二〕すべて之に似たる四角形のもの。

ます 増(他動四段) 殖にさする。

ます 增(自動四段) 〔一〕物の量の殖ゆる。〔二〕優る。

ます 坐(自動四段) 有らせ給ふ。●居給ふ。

ます (自動四段) 申すの略。○榮花「兵亂などトひましつるは」「人毎にましおもひたる」

ます (自動下二段) 大人ぶりて見ゆる。●年輩ぶりて見ゆる。(六帖)

ます 坐(助動四段) 〔一〕給ふ。〔二〕俗語對話の時は他の方にも我方にも總べて動詞に添へて敬語として用ふ。○「御機嫌よく入らせられますか」「私も參ります」

ますす 交(他動下二段) 交じらしむる。●混合する。

まする 痲醉(名) 藥の力にて人事不省となる事。△(動)—痲醉す。

ますほ(カ) (名) まそほのすゝきを見よ。

ますほのすすき (名) まそほのすゝきを見よ。

ますかがみ 十寸鏡(名)(枕) 眞澄鏡の略。明かに曇なき鏡。●すべて之に緣故ある見る、照る、清し、磨く、懸く、蓋、面影などの枕詞とす。(萬葉)

ますがた 枡形(名) とかたに同じ。

ますかき 枡掻(名) 斗掻に同じ。

ますらを 正占(名) 正しき占ひ。●よく合ふ占ひ。(雅)

ますらを 大丈夫(名) 〔一〕猛き男。●武夫。●大丈夫。(だいぢやうふ)

〔二〕男。○新古今「雨ふれば小山のますらを喂あれや苗代水を空にまかせて」

ますらをこと 益荒男(名) ますらをに同じ。(萬葉)

ますらをの 大丈夫の(枕) 手結(ゆひ)(越中地名)の枕詞。大丈夫の手に纏く手結さいひかけたるなり。(萬葉)

ますらたけを 大丈武夫(名) ますらをに同じ。

ますう (名) まそほのすゝきを見よ。

ますぐ 眞直(名) まっすぐ。●正直。●直線。△(形)—ますぐなる。(副)—ますぐに。

ますます 益(副) 其上に其上にと。●段々。●いよ〳〵。

ますげ 眞菅(名) 菅に同じ。

ますげよし 眞菅よし(枕) 菅(すげ)とそがとは近き音の文字なれば重れて用ひたる蘇我(姓)の枕詞。(萬葉)

ますざ 枡座(名) 德川時代。公許を得て枡を賣り捌く所。

ますめ 枡目(名) 枡にて量りたる量。

ますみのいろ 眞澄の色(名) 清く澄みたる色。●美しき色。(堀川)

ますみのかがみ 眞澄鏡(名) ますかがみを見よ。